

Dombey and Son

——家父長制神話の崩壊とフローレンスの役割——

吉 田 一 穂

序

Dombey and Son (1848) は、1846年9月から1848年3月まで、月刊分冊として刊行された作品である。チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-70) にとって、*Dombey and Son* は貴重な出発点であった。ディケンズの作品の中で、創作ノートが完全な形で残っているのは、これが最初である。そしてこの創作ノートから、彼が毎号分をあらかじめどれほど注意深く準備したか、見て取ることができる。中心的テーマをめぐって、入念にプロットを組み立てているのだ。舞台は執筆当時の時代である。叩き上げのシティの商人であるドンビー (Dombey) 氏の冷たく計算高い自負心が物語を支配している。しかし、それはまた、恥知らずにも無慈悲で偽善的な社会全体を体現している。この社会には、思いやりと寛大さ、親切や愛を入れる余地はほとんどなく、そこでは人間同士の最も近い関係ですら、金銭的価値との関連で見られることになる (James 67)。

作品において顕著なことは、ドンビー氏が社会的価値を家庭に持ち込むことによりもたらされる弊害である。フィリップ・ホブスバウム (Philip Hobsbaum) が「*Dombey and Son* は、ビジネスというよりも家族関係についての作品である」(Hobsbaum 110) と述べているように、作品はドンビー氏がビジネスを家庭に持ち込むことにより、家族関係、特に父と娘の關係に支障を来たす物語である。父と娘のテーマは、ディケンズが後の作品 *Hard Times* (1854)、*Little Dorrit* (1857) でも用いたテーマであり、このテーマを用いる

ことにより、ディケンズは、社会的価値を家庭に持ち込むことの危険性を示している。*Dombey and Son* において見落としてはならないことは、ドンビー氏が自身の価値基準を家庭内に持ち込むがゆえに、息子ポール (Paul) の本性を無視し、娘フローレンス (Florence) との接触を拒み、娘の精神を圧迫し、彼女を家から締め出してしまうことだ。ドンビー氏の価値基準には、彼の後天的自己が関係している。この後天的自己は、ドンビー氏にのみ見られるわけではなく、ディケンズの他の登場人物にも見られる。*A Christmas Carol* (1843) のスクルージ (Scrooge), *Bleak House* (1853) のデッドロック (Dedlock) 夫人, *Little Dorrit* (1857) のウィリアム・ドリット (William Dorrit), *Great Expectations* (1861) のピップ (Pip) などが例として挙げられる。彼らは、現実社会を生きていく上で有利であると考え後天的自己を形成し社会に適応していこうとするが、本性に逆らいがたく逆戻りする。ドンビー氏もまた家族との関係や破産によって、本性に逆らいがたく逆戻りする。

注目に値することは、*Dombey and Son* において家父長制神話の崩壊とドンビー氏の本性の回復が密接に結びついていることである。ドンビー氏は当初フローレンスの価値を認めていなかったが、本性を回復した後、彼女の価値を認めるに至る。ジョン・ミー (Jon Mee) は、「成り上がり者として振舞うよりも、むしろドンビーのような商人は、経済力に文化的権威づけをするため、上流階級の威信をまねようとする」と述べている (Mee 79)。経済力に文化的権威づけをしようとしたドンビーは、社会的に権威のある存在となろうとしたが、家庭の中で娘を無視していた。彼にとっては、跡取りの息子のみが重要であった。しかし、息子の死後、娘に救われることにより、商売では失敗したものの安らかな人生を得る。現在に到るまで、娘との関係においてドンビー氏が本性を歪め不自然な状態にあったことにあまり注意が向けられていなかったが、このことは見落とすことができない事柄である。なぜならば、*The Mayor of Casterbridge* (1886) でトマス・ハーディ (Thomas Hardy, 1840-1928) が市長として成功した後、没落していくヘンチャード (Henchard) を描き出す際、仕事だけでなく、人生にも失敗することを読者

に印象づけているようには、ディケンズは、ドンビー氏を描写していないからである。ドンビー氏が娘により救われ、人生に失敗したわけでないことは確かであり、このことを考える場合、さらにドンビー氏を家庭との関係で考える必要性が生じる。

本論文では、*Dombey and Son* をドンビー氏と家庭という観点から考え、ドンビー家の家父長制神話の崩壊とフローレンスの役割について考察してみたい。

1. ポールの生前

Dombey and Son を家父長制の関係から考える場合、ドンビーとフローレンスの相関関係は、時期的に大きく二つに分けて考えることができる。一つはポールの生前であり、もう一つはポールの死後である。ここではポールの生前の関係について考えたい。

ポール・デイヴィス (Paul Davis) が指摘しているように、祖父と父親から商会を引き継いだドンビー氏は、「17世紀と18世紀の重商主義の時代を表している人物」である (Davis 142)。また、アンドルー・サンダーズ (Andrew Sanders) が指摘しているように、「ドンビー氏は19世紀初期の営利主義の価値体系の代表者であり、金持ちで商売の世界で傑出していることを誇りにしている男」である (Sanders 122)。ドンビー氏にとってこの世は、ドンビー親子商会のために存在するようなものであり、太陽と月さえも彼らを照らすようにできている。彼にとって一番重要なことは、代々引き継がれてきた商会を確実に次世代に引き継がせることであった。もちろん引き継ぐ人間は彼の息子であり、娘は商会にとって全く関係のない存在なのだ。ディケンズが説明しているように、ドンビー氏は娘に嫌悪を抱いていないが、生まれたときから彼女を重視していない。それは、娘が商会を引き継ぐわけではないという彼の気持ちからきている。ジェンダーの問題に注目するエリザベス・A・キャンベル (Elizabeth A. Campbell) は、「フローレンスの家父長制に対する罪は、女性として生まれてきたことである」と述べているが

(Campbell 98), ドンビー氏は、フローレンスの誕生を罪とは思っていない。ただ、商会にとって娘は不要だという気持ちは持っている。その気持ちは、息子のポール (Paul) が生まれてからますます強くなる。ドンビー氏は、姉のルイーザ (Louisa) に「ポールの幼少期が順調に過ぎ、彼が一刻も早く生まれながらにあてがわれたポストにふさわしい人間に成長してくれさえすれば、ぼくに文句はありません。後はあいつが好きなように有力者の知遇を得ればいい」(46),¹「誰にもぼくと息子の間に割って入ってほしくないんです」(46)と言う。ドンビー氏の言葉は、ドンビー父子商会に娘は不要であることを暗示している。ルイーザもまた、「フローレンスはきつすいのドンビーにはなれっこありませんからね、たとえ千年生きながらえたって」(48)と言うことにより、ドンビー氏の考えを肯定している。このようなドンビー氏とルイーザの言葉は、ドンビー氏の家庭では、男性の長子相続が当然であり、男性優位主義的な価値観が支配的であることを示している。

ドンビー氏の価値観は、彼の営利主義に由来している。19世紀初期の営利主義の価値体系は、産業革命後の社会的発展と密接に関係している。その社会的発展を象徴するものが鉄道であった。‘Stags’ とは株でもうけようと投機する人を指す当時の俗語であり、ディケンズのスタッグズ・ガーデンズ (Stagg’s Gardens) の描写は、鉄道のすさまじい迫力を強調している (Schlicke 186)。1825年最初の鉄道がストックトン (Stockton)－ダーリントン (Darlington) 間に開通し、1840年代中頃に鉄道ブームが到来した。*Dombey and Son* が出版されて3年後、遊覧旅行の列車が大博覧会を見に行く何千人もの労働者たちや彼らの家族をロンドンに運んだ。ローレンス・ラーナー (Lawrence Learner) が、「当時鉄道が金を意味した」と指摘しているように、鉄道は投資家によって作られる富と関連づけられた (Learner 195)。ドンビー氏の営利主義は、このような社会的背景からも形作られていると考えられる。ドンビー氏は商会の金を生み出すのは息子であり、娘ではないと考えるがゆえに、フローレンスの存在を軽視する。

このようなドンビー氏は、息子に金について尋ねられる。「お金ってどん

なことができるの？」(92)と尋ねられたドンビー氏は「お金は何だってできるんだ」(92)と答えるが、「もしお金がいいやつで何でもできるなら、どうしてママを助けてくれなかったんだろう？」(92)と言うポールに、ドンビー氏は金には力があってどんなことがあっても見くびってはならないが、人の命までは救えないのだと説明せざるを得なくなる。このようなドンビー氏は、ポールをフローレンスより大切に扱うが、フローレンスの本性だけでなくポールの本性をも無視する。カール・スミス (Karl Smith) は、「ドンビーは、フローレンスの美德を窒息させてしまうような雰囲気在家中庭で作る。そうすることでドンビーはポールにも住むのに適さない世界を作る。ポールはドンビーが入れようとする型にぴったり入らない」(Smith 132)と述べている。ドンビー氏は、商会の跡継ぎとしてのみ息子を考えるがゆえにポールの本性を無視してしまうのだ。ポストにふさわしい素養を身につかせようとするドンビー氏は息子に教育を受けさせるが、ポールが送り込まれるブライトン (Brighton) のブリンバー (Blimper) 博士の寄宿学校は、子供の本性を無視するような学校である。ディケンズは、ブリンバー博士の寄宿舎学校について次のように描写している。

In fact, Doctor Blimper's establishment was a great hothouse, in which there was a forcing apparatus incessantly at work. All the boys blew before their time. Mental green-peas were produced at Christmas, and intellectual asparagus all the year round. Mathematical gooseberries (very sour ones too) were common at untimely seasons, and from mere sprouts of bushes, under Doctor Blimper's cultivation. Every description of Greek and Latin vegetable was got off the driest twigs of boys, under the frostiest circumstances. Nature was of no consequence at all. No matter what a young gentleman was intended to bear, Doctor Blimper made him bear to pattern, somehow or other. (141)

何を隠そう、プリンバー博士の寄宿学校は促成装置がひっきりなしに回っている巨大な温室。少年は一人残らず早咲きだった。知的グリーンピースがクリスマスに採れ、ガリ勉アスパラガスが一年中ニョキニョキ伸びていた。数学グスベリー（しかもたいそうすっぱいやつ）はプリンバー博士の鋤き返しのおかげで、匂でもないのに灌木のほんの若枝からもたわわに実った。ありとあらゆる種類のギリシア・ラテン野菜がどんなに霜深い季節でも、少年たちのどんなに干からびた小枝からも摘み取れた。『自然』などでんでお構いなしだった。若き殿方が生来どんな実を結ぶようにできていようと、プリンバー博士はとにもかくにも杓子定規に実を結ばせた。

引用は、プリンバー博士の学校の教育が自然を無視し、少年たちの精神面を無視した教育であることを示している。ディケンズに先んじてトマス・カーライル (Thomas Carlyle, 1795-1881) もまた、*Sartor Resartus* (1833-34) において同様の教育を示し、批判している。カーライルは、主人公トイフェルスドレック (Teufelsdröckh) がヒンテルシュラグ (Hinterschlag) 中等学校でギリシア語とラテン語を機械的に教えられたことを、人間の本性も少年の本性も知らない先生たちによるものであることを指摘しているからである。教育により精神の自由を奪われたポールは、「持っているお金をみな銀行に預けて、もうお金なんかこれっぽっちももうけようとせずに、大好きなフローレンスと一緒に田舎に引っ越して、きれいなお庭や畑や木立ちに囲まれて、一生彼女と一緒に暮らすんです」(190)とピプチン (Pipchin) 夫人に自身の夢を語る。ポールが語る夢は、彼が父親の金儲けの道具にされようとしていることをうすうす感じていて、精神が窒息しそうになっていることを示している。またポールの言葉は、フローレンスがポールの精神にとって必要不可欠の存在となっていることを示している。ポールは、父親に自然な状態を奪われたまま死んでしまうが、ディケンズは、跡継ぎを失ったにもかかわらず、自身の価値基準を貫こうとするがゆえのドンビー氏の悲劇を次に示している。

2. ポールの死後

ポールの死後もドンビー氏は、娘に対する態度を変えない。デイケنزは第20章でドンビー氏と娘の関係を、「娘の慕わしげなあどけない顔が浮かんできても、心は少しも和みもひきつけられもしなかった。彼は天使を拒絶し、胸中に住んでいる、人を苦しめるような悪魔と手を組んだ」(283)と表現している。実業界の有力者ドンビー氏は、フィールディング (K. J. Fielding) が指摘しているように、プライドのゆえに、また金で買えるイーディス (Edith) の身分と美しさのゆえに、さらにイーディスが別の息子を産んでくれるかもしれないがゆえに、イーディスと結婚する (Fielding 59)。ドンビー氏は尊大で厳しいイーディスが家の接待を取り仕切る様を思い浮かべ、ドンビー父子商会の威厳が彼女によって高められると考える。ドンビー氏の自己は、大きく社会的価値に影響されている。デイヴィスは、「ドンビー氏の剛直なプライドは貴族階級の支配に基づく社会における劣等感に由来しているかもしれない」と分析しているが (Davis 142)、金でなんでも買えるという優越感と貴族階級に対する劣等感によりドンビー氏はバグストック (Bagstock) 少佐に簡単にあやつられ、イーディスに魅せられる。第31章「婚礼」で、ドンビー氏はバグストック少佐に「今日のあなたはイギリス一の幸せ者ですね」(440)と言われるが、ドンビー氏は彼の方こそイーディスに大なる榮譽を授けることになっているのであって、彼女こそ、イギリス一の幸せ者であると考えているからである。ドンビー氏のプライドは何とか保たれ、彼はイーディスを手に入れるが、ドンビー氏のプライドとイーディスのプライドは家の中で激しくぶつかり合う。ミーが指摘しているように、フィーニックス (Feenix) 卿と親戚関係にあるイーディスと結婚することは、「貴族の好意を得たいというドンビー氏の願望を表しているように見える」が (Mee 79)、その結婚は、皮肉にもドンビー氏の家庭の中での幸福を奪うものであった。ドンビー氏は金遣いが荒く、豪華なアクセサリーやきらびやかなドレスを散乱させ、高価な物に対し侮蔑的態度をとる妻に自分こそ家父長であるこ

とを思い知らせようとする。ドンビー氏は、カーカー (Carker) に「カーカー、この際ははっきり言うておくが、断じて我が意は掟であり、我が人生の鉄則に一つの例外たりとも認めるわけにはいかない」(595)と自身の方針を伝える。

ジョン・スチュアート・ミル (John Stuart Mill, 1806-73) は、*On the Subjection of Women* (1869) で、「全ての道徳が女性の義務として教え、全ての現今の感傷性が女性の天性として指摘するものは、人のために生きるということである。すなわち、女性は完全に犠牲とならなければならない、愛情以外に生くべきものはないのである」(Mill 43)と述べている。ドンビー氏は、ミルが述べているところの女性の義務を当然のことと考え、人の妻たるものは、夫に完全に従属していなければならない、と考え、イーディスにも自身に完全に従属してもらいたいと考える。ドンビー氏は、自身の意志に従おうとせず、夫を夫とも思わぬところがあるイーディスをなんとか従わせようとする。

ドンビー氏がイーディスに期待するのは、ヴィクトリア朝時代における男性にとっての理想の女性である。一方でイーディスが求めるのは、自分の精神にとって快適な状態である。そのことは、イーディスが言う「私をがんじがらめにしておいでの鎖から私を自由にしてください」(658)という言葉からもうかがえる。離婚をほのめかすイーディスに対し、ドンビー氏は、「ドンビー氏が女房に逃げられたと人々がうわさするとでも言うのか！」(659)と言う。このことは、ドンビー氏が自身の社会的立場と世間体を気にしていることを示している。しかし、イーディスはドンビー氏の期待を裏切り、結婚記念日にカーカーと駆け落ちする。フローレンスは、父親を哀れに思い、今までの拒絶も恐れることなく駆け寄るが、ドンビー氏は残酷にも腕で彼女を斜めに打ち払う。父親の冷酷と無視に耐えてきたフローレンスであったが、彼女は自分にとって父親はもはやないと考え、屋敷を飛び出す。フローレンスの行動がイーディスの駆け落ちと時を同じくすることには意味がある。それは、父親に従属してきたフローレンスもまた、イーディスと同じように自分の精神にとって救いとなる場所を求める以外に方法がなくなることだ。

3. 娘の逃避と娘による救済

第49章において、フローレンスは在天の「父」を除いてもうこの世に「父」はいないと感じ、心の底から救いを求めている。全能者であるディケンズは、フローレンスを救い出すため、海を仲立ちとした変化を用いている。海を仲立ちとした変化は、*Dombey and Son* だけでなく *Bleak House* にも見られる。船医としてインドへ渡ったアラン・ウッドコート (Allan Woodcourt) は、帰国後エスタ (Esther) と結婚する。フライト (Flite) お婆さんは、インド洋での難破では何百人という死者や瀕死の患者が出たが、ウッドコートが多くの命を救い、飢えと渇きにもぐちをこぼさず、多くの命を救い、自分の着物を他人に与えたこと、率先して模範を示し、指揮をとり、病人を看護し、死者を葬り、最後には生き残りを無事陸地へと導き、皆がこの行為をしたウッドコートを神のように崇拜したことをエスタに語る。このようなウッドコートは、エスタにとっても救済者と言っていい。

Dombey and Son においてフローレンスの救済者となるのは、ウォルター・ゲイ (Walter Gay) である。ディケンズによるフローレンス救済のコンテクストは、すでに作品の前半部分に窺える。第6章でシンデレラのガラスの靴をあてがう童話の王子のようにフローレンスの足に靴をはかせるウォルターは、伝説の人物で貧しい少年からロンドン市長にまでなったディック・ウィットントン (Dick Whittington, 1358-1423) を思わせる人物である。ディケンズがウォルターをディック・ウィットントンにたとえていることは、第11章の最後で、カトル (Cuttle) 船長がフローレンスとウォルターの婚約とウィットントン神話を想像することから明らかである。² ウィットントンは、裕福なサー・ジョン・フィッツウォレン (Sir John Fitz-Warren) の見習いとして働き、後に彼の娘と結婚する。ウォルターはロンドン市長にまではならないが、ウォルターとウィットントンの共通点は、自分より立場が上の女性と結婚することである。ディケンズは、第19章でウォルターがフローレンスを自分より立場が上の女性であると考えていることを示している。

「ミス・フローレンス」と呼んでいたウォルターにフローレンスは、よそよそしいので「フローレンス」と呼んでくれと言う。ウォルターはそんなことはできないと言う。またウォルターは、「社長とほくみたいな若僧との間には大変な隔りがあります」(265)と言う。このことから、雇用者から見て社長の娘は、下から見上げる存在なのだ。

ウォルターはドンビー氏に、西インド諸島に送られるが、難破により溺死したと思われていた。しかし、彼は生きていて、父親による精神的虐待に耐えかね逃避し、カトル船長によってかくまわれていたフローレンスに再会する。ディケンズは、ウォルターと再会したフローレンスの様子を次のように描写している。

She had no thought of him but as a brother, a brother rescued from the grave; a shipwrecked brother saved and at her side; and rushed into his arms. In all the world, he seemed to be her hope, her comfort, refuge, a natural protector. (693)

彼女は彼を兄としてしか、九死に一生を得た兄としてしか、大海原で命拾いをして、こうしてまた自分の下に戻ってきてくれた兄としてしか、意識していなかったから、その胸に飛び込んだ。この広い世界で彼こそ彼女の希望であり、慰めであり、隠れがであり、生まれながらの護衛であるかのような気がした。

引用は、行く当てのないフローレンスがウォルターに慰めを見出していることをよく示している。ただすぐには、両者の距離は縮まらない。それはウォルターが「お嬢さん！ フローレンス！ ほくはあなたを救えるなら、命だって惜しくない。でもあなたの周囲には、立派でお金持ちの方ばかりおられるし」(695)と言うようにウォルターがフローレンスとの結婚を身分違いであると思っているからである。フローレンスとウォルターとの結婚は、フロー

レンスが「もしも私をお嫁さんにしてくれたら、ウォルター、私、あなたを心から愛してよ。もし私と一緒に連れて行ってくれるなら、世界の果てまでついていくわ」(713)とすることにより可能となる。フローレンスの言葉は、父親の元にて父親の考える社会的価値を受け入れ、自身の中の自然を失った状態で生きていくよりは、立場が下であったとしても自分の精神にとって快適な状態を与えてくれるウォルターを求める彼女の深層心理を表している。

ウォルターとフローレンスの身分違いの結婚は、フローレンスの歩み寄りにより可能であるが、一方で誘惑者カーカーは、イーディスの心を動かすことができない。カーカーはシチリアと一緒に暮らすことを提案するが、イーディスに拒否され、ついには列車に引き殺される。ラーナーが「列車の役割はもはや経済的役割でなく道徳的役割であり、神罰の道具である」(Lerner 199)と述べているように、かつて鉄道株へ投資する投資家によって作られる金を意味した鉄道は、ついには、悪を罰する道具となる。ディケンズは、作品において金を中心にした価値観、唯物論的価値観を批判している。娘であるという理由で *Dombey and Son* にとって不用なものと見なされたフローレンスは、ドンビー氏の元から逃避する。「ウォルター、私のこの気持ち、あなたには決してわからないわ。私はあなたのことが自慢でならないのよ。あなたのうわさをする人たちが、あなたが貧しい家出娘と結婚したって言わなきゃならないと思うと、うれしくってたまらないのよ」(789)、「ウォルター、たとえ私に何百ポンドの持参金があったとしても、こんなにもあなたのために幸せな気持ちにはなれなかったでしょうよ」(789)というフローレンスの言葉は、ドンビー氏の金を中心にした価値観を否定する言葉であり、ドンビー氏とイーディスの金と身分が関係している結婚を否定する言葉でもある。

イーディスにも娘にも逃げられたドンビー氏は、破産に直面する。19世紀半ばまで、イギリス中のほぼ全ての事業主は、彼の商売のなかで負わされた負債に対して、彼が所有するものすべて一屋敷や家財道具も含めて一を残らず投げうってでも個人的責任を取らなければならなかった。したがって、もし彼が破産すれば、商売だけでなく、たいがい個人所有物まで失うこと

になったのだ。そう考えると、ドンビー氏を襲った個人的な経済破綻が徹底的なものであったのもうなずける (Pool 97)。

借金が家賃というかたちでない場合や、債権者が相手の財産を差し押さえることを明確に許可する受け渡し証書や抵当証書のような証書類によって返済が保証されていない場合、その人は「破産者」か「債務者」の宣告を受けることになる。破産者の宣告を受けたときは、週二回発行される公式の『ロンドン官報』(*London Gazette*)で、その名前が公表される。すると執行吏がやって来て、その人の屋敷や所有物を差し押さえ、その財産を現金化して可能な限り借金の返済に充てるという取り決めが債権者とのあいだで行われる (Pool 98)。 *Dombey and Son* では、家中の品物が競売に付される。ディケンズは、物色されるドンビー家の様子を次のように描写している。

Then, all day long, there is a retinue of mouldy gigs and chaise-carts in the street; and herds of shabby vampires, Jew and Christian, over-run the house, sounding the plate-glass mirrors with their knuckles, striking discordant octaves on the Grand Piano, drawing wet forefingers over the pictures, breathing on the blades of the best dinner-knives, punching the squabs of chairs and sofas with their dirty fists, touzling the feather beds, opening and shutting all the drawers, balancing the silver spoons and forks, looking into the very threads of the drapery and linen, and disparaging everything. (832-33)

それから、一日中、お供のカビ臭いギグや幌付馬車が通りを埋めつくし、みすばらしい吸血鬼の輩が、ユダヤ教徒たろうとキリスト教徒たろうと、屋敷に溢れかえる。磨き板ガラスの鏡を拳で叩いたり、グランド・ピアノで耳障りな音階をかき鳴らしたり、人指し指にツバをつけて絵をなぞったり、最高級ディナー・ナイフの柄にハアッと息を吹き掛けたり、椅子やソファのクッションに薄汚れた握りこぶしでパンチをお見舞い

したり、羽根ぶとんをもみくちやにしたり、引き出しを端から開け閉めしたり、銀のスプーンやフォークでやじろべえをしたり、垂れ布やシーツの糸目の奥まで覗き込んだり、そのくせ何から何まで鼻でせせら笑いながら。

引用は、吸血鬼にたとえられる人々にドンビー一家が物色される様子を示しているだけでなく、ドンビー家の崩壊を示している。このことは、*The Mayor of Casterbridge* でヘンチャードが破産に直面し、所有物が競売に付されることを思い起こさせる。ハーディは、ヘンチャードがニューソン (Newson) の娘エリザベス (Elizabeth) を自分の娘であると偽り、その偽りがエリザベスの知るところとなるがゆえに家庭的な幸福を得ることができないことを示している。一方で、ディケンズは *Dombey and Son* で異なる結末を示している。

ドンビー氏は自ら破産に直面し、ようやく拒まれ、打ち捨てられた娘の気持ちを知る。ドンビー氏は悲嘆と悔悛に打ちひしがれるが、彼を救ったのは戻ってきた娘であった。フローレンスはドンビー氏に祈りを捧げ、「パパ！ いたいパパ！ ごめんなさい、どうか私を赦して！ 私、こうしてひざまずいて赦しを請うために戻ってきたの。こうでもしなければ、もう二度と幸せにはなれないわ！」(843)と言う。ドンビー氏は、娘が変わってはず、自分に赦しを請う姿を見る。*Dombey and Son* と *Hard Times* (1854) の父親と娘の関係が異なっている点は、*Dombey and Son* では娘が折れて出ることにより父親に赦しを請う一方、*Hard Times* では、結婚に失敗した娘により父親が反省せざるを得ないことである。この点を考えると、*Dombey and Son* においてフローレンスは自ら赦しを請うことにより、かつて冷酷だった父親を赦していることとなる。すなわち、家父長制が崩壊した今となっては、ドンビー氏にとってフローレンス以外に救いはないのだ。

アーリン・M・ジャクソン (Arlene M. Jackson) は、「多くの点においてフローレンスは興味深い人物ではない。なぜなら彼女は外的な力に対し、妙に

優しく屈辱的であるからだ。我々がヴィクトリア朝時代の理想的女性の概念が彼女に色濃く見られることを理解した後でさえもディケンズの技巧は彼女のイメージをどうにもできない」と述べている (Jackson 114)。フローレンスにはジャクソンが述べているように、ヴィクトリア朝時代の理想的女性の概念が色濃く見られる。フローレンスの働きかけがなければドンビー氏が変わらないことは、男性が社会的存在であることを示しているのみならず、ドンビー氏が社会的価値に基づく自己を保ったまま硬直化していることを示している。第55章「応報」においてドンビー氏の屋敷の料理女が「力ある者は倒れ」(829)³と言い、メイドが「驕れる者は久からず」(829)⁴と言い、屋敷が廃屋になるだけでドンビー氏自身に救いもたらされることは、ディケンズがドンビー氏に人間の自然な状態や精神の重要性を認識する余地を与えたためであると考えられる。第62章でディケンズは、ドンビー氏が今や白髪の老紳士となっている姿を描き出している。ドンビー氏の顔には心労と苦悩の深いしわが刻まれている。ディケンズは、それを「永遠に過ぎ去った嵐の痕跡」(873)であり、「後には澄み渡った夕べが広がっている」(873)と説明している。またディケンズは、「ドンビー氏がもはや野望に満ちた企てに煩わされることがなく、彼が娘夫婦を誇りにしている」(873)と説明している。このことは、19世紀初期の営利主義の価値体系の代表者であったドンビー氏にもまた、自然が必要であり、彼が人生において自然な状態の重要性を認識したことを意味している。自身の精神が耐え切れなくなり逃避したフローレンスによって救われることにより、ドンビー氏もまた自身の自然に目覚めるのだ。

結 び

デボラ・エプスタイン・ノード (Deborah Epstein Nord) は、「ウォルターとフローレンスの結婚がドンビーの家系を苦しめてきた死と無気力のサイクルを破壊する」と指摘している (Nord 95)。ノードが指摘しているように、ウォルターとフローレンスが男の子と女の子を授かるがゆえに、両者の結婚

は、ドンビー家の家系を救う意味がある。しかし、*Dombey and Son* においてそれ以上に重要なことは、両者の結婚により、ドンビー氏が本性を歪めた不自然な状態から回復することにある。

本論文では *Dombey and Son* をドンビー氏と家庭という観点から考えてきた。ディケンズは、ドンビー氏が社会的価値基準を家庭内で貫こうとするがゆえの弊害を描き出している。ドンビー氏の社会的価値基準は彼の営利主義に由来していて、彼は商会の金を生み出すのは息子であり、娘ではないと考えるがゆえにフローレンスの精神を無視する。ドンビー氏はまた、商会の跡継ぎとしてのみ息子を考えるがゆえにポールの本性を無視し、結果としてポールの死に直面する。ドンビー氏はポールの死後も娘に対する態度を変えず、ついにフローレンスは耐えられなくなり、自身の精神にとって救いとなる場所を求める。家庭に慰安を与え (Ellis 14)、やさしく、害をもたらさず、慎み深く、受動的で感じのよい (Ellis 17)、ヴィクトリア朝時代の理想的女性フローレンスが家庭を飛び出すことは、フェミニズムの先駆けとしての行動ととらえることができる。しかし、フローレンスが父親に赦しを請うことにより、彼女は依然としてヴィクトリア朝時代の理想的女性であり続ける。一方で、社会的価値に基づく自己を保ったまま硬直化したドンビー氏は、フローレンスによって救われることにより人間の自然な状態の重要性に目覚める。このことから、*Dombey and Son* においてディケンズは、自身の精神が耐え切れなくなり逃避したフローレンスの救済だけでなくドンビー氏の救済のコンテキストをも用意した、と言っているだろう。

注

1. Charles Dickens, *Dombey and Son* (New York: Oxford UP, 1987), p. 46. この作品からの引用文は、この版により、引用末尾の括弧にページを示す。日本語訳の部分は、田辺洋子訳『ドンビー父子』（こびあん書房）を参考にした。
2. アンドルー・サンダーズは、「カトル船長は、意味なくウォルター・ゲイのドンビーの娘とのメリットのある結婚のチャンスを有名な商人ディック・ウィットイントンの運命と関連づけているわけではない。なぜならば、ドンビーと彼

の会社は商売上の富と商売と貿易から利益を得る伝統的な方法を具体化しているからである」と述べている (Sanders 122)。

3. これは、『サムエル記下』第1章第19節「イスラエルよ、あなたの栄光は、あなたの高き所で殺された。ああ、勇士たちは、ついに倒れた」、第25節「ああ、勇士たちは、戦いのさなかに倒れた。ヨナタンは、あなたの高き所で殺された」から来ている。
4. これは、『箴言』第16章第18節、「高ぶりは滅びにさきだち、誇る心は倒れにさきだつ」から来ている。

作 品

Charles Dickens. *Dombey and Son*. New York: Oxford UP, 1987.

参 考 文 献

- Campbell, Elizabeth A. *Fortune's Wheel: Dickens and the Iconography of Women's Time*. Athens: Ohio UP, 2003.
- David, Paul. *Dickens Companion*. Harmondsworth: Penguin Books, 1999.
- Ellis, Sarah Stickney. *The Women of England, Their Social Duties and Domestic Habits*. London: Peter Jackson, Late Fisher, Son & Co., 1839.
- Fielding, K. J. *Studying Charles Dickens*. Harlow: York P, 1986.
- Hobsbaum, Philip. *A Reader's Guide to Charles Dickens*. London: Thames and Hudson, 1972.
- Jackson, Arlene M. "Reward, Punishment, and the Conclusion of *Dombey and Son*", *Dickens Studies Annual* Vol. 7. Ed. Robert B. Partlow, Jr. Carbondale: Southern Illinois UP, 1978.
- James, Elizabeth. *Charles Dickens*. New York: Oxford UP, 2004.
- Learner, Laurence. "An Essay on *Dombey and Son*", *The Victorians*. Ed. Laurence Learner. London: Methuen & Co., 1978.
- Mee, Jon. *The Cambridge Introduction to Charles Dickens*. Cambridge: Cambridge UP, 2010.
- Mill, John Stuart. *The Subjection of Women*. Ed. Stanton Coit. London: Longman, Green, and Co., 1924.
- Nord, Deborah, Epstein Nord. *Walking the Victorian Streets: Women, Representation, and the City*. London: Cornell UP, 1995.

Dombey and Son

- Pool, Daniel. *What Jane Austen Ate and Charles Dickens Knew*. New York: Simon & Shuster, 1993.
- Sanders, Andrew. *Charles Dickens*. Oxford: Oxford UP, 2003.
- Schlicke, Paul. “Dombey and Son”, *Oxford Companion to Dickens*. Ed. Paul Schlicke. Oxford: Oxford UP, 1999.
- Smith, Karl. “Little Dorrit’s “speck” and Florence’s “daily light”: Urban Contamination and the Dickensian Heroin”, *Dickens Studies Annual* Vol. 34. Ed. Stanley Friedman, Edward Guiliano, Anne Humpherys, Michael Timko. New York: AMS P, 2004.
- ダニエル・プール, 『19世紀のロンドンはどんな匂いがしたのだろうか』, 片岡信 (訳), 東京: 青土社, 1997.

Dombey and Son:
**The Collapse of the Patriarchal Myth
and the Role of Florence**

YOSHIDA, Kazuho

Dombey and Son (1848) is Dickens's seventh novel, published in monthly parts by Bradbury & Evans, from October 1846 to April 1848, with the illustrations by Hablot K. Browne (1815–1882), and published in one volume in 1848. Conceived by Dickens as novel about pride, *Dombey and Son* exhibits more careful planning and execution than the novels that precede it. Its characters and situations all contribute to the development of the main theme, which the novel expresses in the symbolic opposition of the railway and the sea.

When the story opens Mr. Dombey, the rich, proud, frigid head of the shipping house of Dombey and Son, has just been presented with a son and heir, Paul, and his wife dies. The father's love and hopes are centered in Paul, the odd, delicate, prematurely old child, who is sent to Dr. Blimber's school, under whose strenuous discipline he sickens and dies. Dombey neglects his daughter, Florence, and the estrangement is increased by the death of her brother. Walter Gay, the frank, good-hearted youth in Dombey's employment, falls in love with her, but is sent to the West Indies by Dombey, who disapproves of their relations. He is shipwrecked on the way and believed to be drowned. Dombey gets married to Edith Granger, the proud and penniless young widow, but his arrogant treatment drives her into relations with his villainous manager, Carker, with whom she flies to France, fiercely repelling, however, the natural view he takes of the situation. They are pursued, Carker meets Dombey in a railway station, falls in front of a train, and is killed. The house of Dombey fails; Dombey has lost his fortune, his son, and his wife; his daughter has been driven by the ill-treatment to fly from him, and has married Walter Gay, who has survived his shipwreck. Thoroughly humbled, Dombey lives in desolate solitude, but Florence returns to him.

Dombey and Son

The representation of Florence's flight from her father takes the initiative in Dickens's later representations of feminism, but Florence's return is different from the return of Louisa Gradgrind in *Hard Times* (1854); Florence asks Dombey to forgive her after the flight while Louisa reproaches her father for his mistake of education. Florence still has the concept of Victorian ideal woman by asking her father to forgive her. After the collapse of the patriarchal myth, the only person who can relieve Dombey, is Florence. Dombey who is still stiff keeping his self based on social value, opens his eyes to natural human condition with the help of Florence. Therefore, it seems reasonable to conclude that Dickens prepared, not only the context of the relief of Florence who fled from her father, but also the context of the relief of Dombey in *Dombey and Son*.